

## 第17回シンポジウム 歴史教科書・いままでとこれから

—「新科目「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」と歴史教育の課題」参加記—

足柄高校 太宰 雅翔

2022年9月25日(日)、歴史教育者協議会などの主催で新科目「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」に向けたシンポジウムが実施され、各科目の教科書の分析を中心に、従来の科目の記述や教科書ごとの比較など、様々な視点に立った報告がなされた。

桐生海正「「歴史総合」の実践的課題-「近代化」をめぐって-」では、「近代化」という視点に対して、各教科書における「問い」「国民国家」「自由民権運動」などテーマごとの記述をもとに比較検討がなされた。「なぜ」「どのように」などの基本的な提示方法に対する議論の余地を指摘しつつ、従来の教科書には見られなかった相互的な視点を育む問いについて提示された。また、「国民国家」「自由民権運動」に関する記述では、従来の世界史と日本史から、何を変え、何を引き継いでいくべきか、探究科目への接続性などの点が指摘された。授業における「問い」という観点からは、特に生徒の興味や思考などに左右するものであり、その点を歴史総合でどう生かすべきか考えるきっかけとなった。

教科書ネット21ワーキンググループ鈴木敏夫「「探究科目」の特徴と課題」では、探究科目の特徴と課題の分析から、探究科目の構造が生徒の学びをどのように深めることができるかについて検討を行った。学習指導要領における「歴史の大観」という軸を念頭に、教科書内では「展望」「画期」という記述が頻出している一方、古代から近現代を貫くような法則性や発展性に対する限界を指摘された。

横田冬彦「「日本史探究」における思考力の育成」では、教科書の編修に関わった視点から、日本史探究における思考力の育成という観点について、その問題点や論点が提示された。学習指導要領改訂の意図を踏まえつつ、鈴木氏と同様に横田氏は教科書内の構成の偏りや「時代」という区分をまとめる定義や理論の曖昧性を指摘することで、個別の「問い」を超えた「通史」的把握の重要性について論じた。従来とは異なる教科書内における様々な枠組みやまとまりを、授業を通じてどのように生徒に捉えさせるべきか、教員個人単位に限らず幅広いレベルでの議論をしていく必要性を感じた。

小島茂稔「「歴史総合」の時代における教員養成の課題」では、これからの教員養成の課題や求められる力量について、大学における教職課程の現状を踏まえた提言を行った。従来の科目の枠組みを超えて歴史的事象を理解した上で、教材を活用するだけでなく自身で教材の発掘を行い、指導法を模索するといった力量をもった人材像が論じられた。また、大学の教職課程をどのようにして充実させるべきかについての試案も提示もされた。

私は高校教員という立場からシンポジウムに参加し、以下の点が重要だと考えた。生徒への思考力育成を主題の一つとした今回の新科目の開設に鑑み、今まで以上に教員は能動的に授業の可能性や自身の歴史観を形成していく必要性に迫られる時代に入りつつあると感じた。しかし、今回の教科書に対する分析からもわかるように、教科書を活用するだけでは教員個人単位の力量により授業のレベルに差が開きやすくなるのではないかと、という懸念も感じられる。そのためにも研究報告や実践例などをもとに、歴史観を形成しつつ、私自身はどのような授業を通して生徒に思考力を育成させたいのかという問いを常に自身に投げかけ、生徒のニーズに鑑みながら自身の授業を見つめ直していきたい。